

美術博物館だより

News Letter From Tomakomai City Museum



イクバスイ

目次 Contents

01 特集

特別展「第一洋食店の100年と苫小牧」

- 02 企画展 知ってほしい とまこまい考古コレクションー縄文からトーチカまでー
- 02 特集展示 「植物細事記ー身近な木々の一年を辿るー」
- 02 クローズアップ 砂浜の銀貨
- 03 令和元年度事業記録
- 04 展示室の貸出し事業
- 04 活動紹介 標本を残す大切さ ～ウトナイ湖の昆虫採集・標本づくり～
- 05 企画展 「NITTAN ART FILE3:内なる旅～モノに宿された記憶」ー物質と記憶の交差する地点
- 05 企画展 「大正・昭和の鳥瞰図と空から見た昭和30年代の苫小牧」
- 06 企画展 「浅野武彦の木版画の世界」ーいのちを見つめる真摯な眼差し
- 06 埋文センター活動報告／勇武津資料館通信
- 07 館長コラム／令和2年度展示会情報／展示室から／表紙の写真／編集後記

特別展「第一洋食店の100年と苦小牧」



第一洋食店創業100年記念ランチ会

苦小牧市の駅前中心街には、横浜で本格的なフランス料理の修行を積んだ山下十治郎が大正8（1919）年に開業した老舗洋食店「第一洋食店」があります。

2019年8月に同店が創業100年の大きな節目を迎えるにあたり、3代目店主山下明氏のご協力のもと、第一洋食店の歴史をおよそ350点の美術、歴史資料とともに紹介する特別展「第一洋食店の100年と苦小牧」を当館で開催しました。

第1章では第一洋食店の創業者、山下十治郎（1884-1945）の足跡と第一洋食店誕生の歴史をたどりました。山梨県で生まれた十治郎は、当時日本最大の規模を誇った横浜グランドホテルで西洋料理の修行を積み、札幌の豊平館にいたとされています。その後、王子製紙株式会社苦小牧工場の迎賓施設である王子倶楽部で司厨長として7年5か月勤務し、大正8（1919）年に独立して第一洋食店を開店しました。

明治時代のメニュー表（横浜開港資料館所蔵）や、第一洋食店とのコラボ企画で十治郎ゆかりの明治時代の洋食を再現し、その料理を食品サンプル化して展示したり、「第一洋食店の香り」を特製の瓶に詰めて“におい”を来館者に嗅いでもらおうという、若干攻めた？仕掛けは視覚のみならず嗅覚もあわせて来館者の興味を引きました。

第2章では、美術作品を中心に展示し、二代目店主の山下正（1913-2011）が戦後の苦小牧に開花させた「第一洋食店カルチャー」について取り上げました。

十治郎の次男として生まれた正は、明治時代の日本に伝わったフランス料理を引き継ぎ、周囲から一目置かれる料理人である一方で、稀代の趣味人でもありました。彼の美意識に引き寄せられるように、店には道内外から様々な人々が日夜集い、やがて第一洋食店は苦小牧の文化サロンとなりました。展示室内には調度品や装飾品、そして版画家・川上澄生や芹沢銈介はじめ民藝運動ゆかりの芸術家たちとの交流を通じて集められた美術・工芸品の数々のほか、山下家ゆかりのコレクションとして新聞錦絵（毎日新聞社所蔵）を道内初公開しました。

第3章では、100年を迎える第一洋食店の現在にスポットを当てました。現店主の山下明（1947-）は少年時代より恵まれた音楽の才能を生かし、大学卒業後は本州で音楽関係の会社に勤めていましたが、苦小牧へ戻り家業を継ぎました。今は100年の歴史をもつ洋食店を夫人と二人三脚で営みながら、店内コンサートを実施するなど、苦小牧の音楽文化の発展にも尽力している三代目の取り組みを映像資料等で紹介しました。

さまざまな人や文化との出会いにより紡がれてきた第一洋食店の親子三代100年の物語（レシピ）は、幾重にも複雑に絡み合い、「北海道の一地方都市の洋食店の歴史・文化」という一言では言い表せない料理のような深みと味わいがありました。

佐藤 麻莉（学芸員／歴史）



展示風景



歴史見学会風景



オープニングセレモニー



食品サンプル作成のための測定

企画展

知ってほしい とまこまい考古コレクション ー縄文からトーチカまでー



解説会風景

令和元年12月20日に「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産への推薦が正式に決定しました。長期間継続した狩猟・採集を行いながらの定住社会、ストーンサークルや大型の集団墓などに代表される複雑な精神世界や社会生活などが評価されています。

残念ながら苫小牧には世界遺産の構成要素となる遺跡はありません。しかし、苫小牧に縄文時代の遺跡がないわけではありません。苫小牧市内では企画展開催時点で295か所（2020年1月時点では299か所）の遺跡が確認されており、道内でも有数の遺跡数を誇ります。苫小牧の遺跡は東部の苫東地域とウトナイ湖から新千歳空港にかけてのエリアに集中しており、市街地にはあまり見られませんが、今でも市内で調査を継続していて新たな遺跡が続々と見つかっています。

苫小牧の遺跡から見つかる遺物は古くは

1万5千年以上前の旧石器時代の石器から第二次世界大戦中のトーチカや塹壕に至るまで幅広い年代のものがああります。また、道内最古級の注口土器や新潟県糸魚川から持ち込まれたと考えられるヒスイ製の装飾品など多岐にわたります。

苫小牧では苫東地域の開発に伴って多くの遺跡が発掘調査されました。本企画展では苫小牧市埋蔵文化財調査センターや北海道埋蔵文化財センターなどが行った発掘調査によって得られた数百万点を超える遺物のなかから選りすぐりのものを展示しました。苫小牧にも縄文時代の遺跡が多くあること、昭和時代の炭焼窯跡やトーチカなども考古学の研究対象となること、今でも市内の調査が行われていることなど多くのことを来場者に知っていただけたかと思えます。今後も苫小牧の考古学について積極的に発信していきます。

岩波 連（学芸員／考古）

特集展示

「植物細事記―身近な木々の 一年を辿る―」



孫田氏によるギャラリートーク

特集展示「植物細事記―身近な木々の一年を辿る―」では、札幌市在住のスクャングラフナーである孫田敏の作品を紹介しました。孫田の作品は、植物をスキャナーで写し取ることで、写真と異なり幅広い部分にピントが合うため、細密な部分まで描写できる点が特徴です。今回は苫小牧で採集した植物で作品を制作し、その一年を辿る構成としました。

展示は3章で構成し、「丘陵・山地の木々」の章ではナナカマドをはじめ街路樹等で馴染みのある高木を取り上げました。現在苫小牧市内でも増加している帰化植物について知ってもらうため、「在来種と外来種」の章ではタンポポとノギクのなかまをそれぞれ3種ずつ取り上げ、その見分け方を紹介しました。「湿原の木々」の章ではハスカップなど、苫小牧の環境を特徴づける湿地性の低木類による作品を展示しました。

会期中の観覧者の様子で興味深かったことは、スクャン作品を美術的な面から楽しむ人と、博物的な面から楽しむ人に分かれていたことです。このことは当館の博物と美術の連携を目指すという目標の達成にもつながりました。

まるで写実画の様に見えることを感嘆する声と、植物の細密な部分まで見えることで新たな気付きがあったという声の両方が聞かれたことは、当企画の「じっくりと観察することが少ない植物の繊細な美しさや形態の面白さを実感してもらおう」というコンセプトが伝わったのではないかと思います。

「植物をじっくりと観察したくなった」という声も聞かれ、この展覧会が身近な植物に注目するきっかけとなれば幸いです。

沖津 かな（学芸員／自然史）

クローズアップ 砂浜の銀貨

美術博物館では不定期に海岸の漂着物の調査を行っています。太平洋に面する苫小牧の海岸には、海流や波によって運ばれてきたいろんな漂着物が大量に打ち上がります。10月9日、調査地のひとつである勇払海岸に「ギンカクラゲ」が100個体以上漂着しているのを見つけました。ギンカクラゲは主に暖かい海にすむクラゲの仲間です。西日本では大量に漂着することがよくあります。ですが北海道では珍しく、調べていると胆振地方では初めての発見になりそうです（詳細は今後の紀要で報告する予定です）。

その名の通り「銀貨」のような美しい姿のクラゲ。みなさんもぜひ探してみてください。

江崎 逸郎（主任学芸員／自然史）



ギンカクラゲ

報告

令和元年度 事業記録

展示事業

《特別展》

■第一洋食店の100年と苫小牧

- 会期：令和元年7月13日(土)～9月16日(月・祝)
入場者：3,889名
特別協力：第一洋食店
後援：毎日新聞社／苫小牧商工会議所／苫小牧信用金庫／北海道新聞苫小牧支社／株式会社苫小牧民報社／株式会社三星
- ①オープニングセレモニー
日：7月13日(土)
参加者：83名
 - ②食と音楽を楽しむー第一洋食店創業100年記念ランチ会
日：8月10日(土)
参加者：34名
 - ③蓄音機クラシックコンサート
日：8月11日(日)
参加者：10名
 - ④ギャラリートーク(全4回)
参加者：183名

《企画展》

■とまこまい考古コレクション ー縄文からトーチカまでー

- 会期：平成31年4月27日(土)～6月23日(日)
入場者：3,894名
後援：苫小牧信用金庫／北海道新聞苫小牧支社／株式会社苫小牧民報社／株式会社三星
協力：千歳市教育委員会
- ①学芸員による展示解説会(全3回)
参加者：47名
 - ②まが玉をつくってみよう
日：5月18日(土)
参加者：18名

■NITTAN ART FILE

- 会期：令和元年10月5日(土)～11月24日(日)
入場者：3,446人
出品作家：浅井真理子／大島慶太郎／小島歌織／山田啓貴
協力：石川県立自然史資料館／NPO法人樽前artyプラス／金沢大学資料館／株式会社中央発條製作所／株式会社堀内カラー／さっぽろ天神山アートスタジオ／至峰堂画廊／スカンジナビア・ニッポン ササカワ財団
後援：苫小牧信用金庫／北海道新聞苫小牧支社／株式会社苫小牧民報社／株式会社三星／北海道新幹線×nittan地域戦略会議
- ①アーティストトーク
日：10月5日(土)
講師：出品作家
参加者：35名
 - ②担当学芸員によるギャラリートーク(全2回)
参加者：30人
 - ③ワークショップ「ルネサンスの技法体験!テンペラと油絵具」
日：11月10日(日)
講師：山田啓貴
参加者：20名

■浅野武彦の木版画の世界

- 会期：令和元年12月7日(土)～令和2年1月19日(日)
入場者：1,323名
後援：苫小牧信用金庫／北海道新聞苫小牧支社／株式会社苫小牧民報社／株式会社三星
- ①担当学芸員による解説会(全2回)
参加者：35名

- ②ワークショップ「おもいでクリスマスカード、年賀状をつくろう」
日：12月15日(日)
参加者：14名
- ③ワークショップ「紙版画をつくろう!」
日：1月11日(土)
参加者：18名

■大正・昭和の鳥瞰図と空から見た昭和30年代の苫小牧

- 会期：令和2年2月8日(土)～3月29日(日)
後援：苫小牧信用金庫／北海道新聞苫小牧支社／株式会社苫小牧民報社／株式会社三星
協力：北翔大学 水野研究室／苫小牧美術愛好会
代表 本間弘章
- ①担当学芸員による展示解説会(全5回)
 - ②特別解説会(全2回)
講師：北翔大学 水野信太郎教授
参加者：49名

《特集展示》

- ##### ■植物細事記ー身近な木々の一年を辿るー
- 会期：平成31年4月27日(土)～6月23日(日)
入場者：3,894名
- ①展示解説会
日：4月27日(土)
参加者：38名
 - ②スキャン実演会
日：5月25日(土)
参加者：33名

■本拠と外／Home and Away

- 会期：令和2年2月8日(土)～3月29日(日)

《収蔵品展》

- ##### ■ユア・セレクションー収蔵名品選展より
- 会期：令和元年12月7日(土)～令和2年1月19日(日)
入場者：1,323名

《中庭展示》

- ##### ■Vol.12 半谷学 「花降りーFlower Fallー」
- 会期：平成31年4月27日(土)～9月16日(月・祝)
入場者：7,531名

- ##### ■Vol.13 坂東史樹「小さくて深い空」
- 会期：令和元年10月5日(土)～令和2年3月29日(日)

《普及事業》

- ##### ■美術博物館大学講座
- 対象：一般 登録者数：113名
- ①入学式・「植物の分布から見た北海道や苫小牧の特徴」
講師：五十嵐博氏(北海道野生植物研究所 所長)
日：6月8日(土)
 - ②「北海道の両生類 ～在来種の魅力と外来種の脅威」
講師：岸田治氏(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 苫小牧研究林 准教授)
日：7月20日(土)
 - ③「今を支える土木遺産」
講師：今尚之氏(北海道教育大学教育学部 准教授)
日：8月24日(土)
 - ④「苫小牧の馬文化～馬とともに生きる～」
講師：武田正哉(当館副主幹)
日：9月21日(土)
 - ⑤「チョウが語る北海道の自然」
講師：永盛敏行氏(富良野の自然に親しむ会 代表)
日：10月19日(土)
 - ⑥「アイヌ風俗画の世界」
講師：新明英仁氏(市立小樽美術館 館長)
日：11月9日(土)
 - ⑦「恵庭の漆文化」
講師：長町章宏氏(恵庭市郷土資料館 学芸員・主査)
日：12月14日(土)
 - ⑧「『風景画』と苫小牧の美術」
講師：細矢久人(当館主任学芸員)
日：1月18日(土)
 - ⑨卒業式 ※新型コロナウイルスの影響により中止しました



■子ども広報部「びとこま」
共催：NPO法人樽前artyプラス
対象：小中学生 登録者数：13名

■古文書解読講座
対象：高校生～一般
初級入門編（全5回） 参加者：115名
中級編（全2回） 参加者：45名

■美術博物館祭 2019
日：7月26日（金）～28日（日）
参加者：1,652人

■ミュージアムラボ
対象：一般
①お正月のあそび～百人一首
日：1月5日（日）
参加者：17名
②エゾシカの角の工作
日：1月12日（日）
参加者：28名

■無料開放日
①ゴーゴーミュージアム
日：5月5日（日・祝）
参加者：1,025名
②あみゆー秋のサンクスデー
日：11月3日（日・祝）
参加者：888名

■見学会・観察会
①自然観察会「双眼鏡で渡り鳥を見つけよう」
日：5月2日（木）
参加者：15名
②自然観察会「実感！しらべてわかるウトナイ湖

の生物多様性－昆虫編－
対象：一般
日：6月29日（土）・7月15日（月・祝）
参加者：13名
③歴史見学会「第一洋食店の足跡を訪ねる」
日：8月30日（金）
参加者：22名

■郷土学習
期間：9月～11月
対象：市内小学校24校3・4年生
参加者：1,521名

■教員のための博物館の日
共催：国立科学博物館／公益財団法人 日本博物館協会
後援：文部科学省
日：8月7日（水）
対象：周辺地域の教員等
参加者：47名

■職場体験
期間：10・11月
対象：市内中学校4校
参加者：9名
■社会科自由研究発表会
共催：市教育研究会社会科部会
日：9月28日（土）
参加者：58名

■学芸員実習生受入
日：8月20日（火）～8月31日（土）
参加者：1名

■ボランティア研修会（全8回）
登録者数：38名

■総合学習・出前講座・講師派遣・アウトリーチ事業
日：随時

※各事業の入場者・参加者数は令和2年3月31日現在のものとする。
※展示事業一覧は、企画展名、開期、入場者数、関連イベントを記載。
※明記の無い事業の主催は全て当館（苫小牧市、苫小牧市教育委員会）による。
※協力等は該当事業のみ記載。
※講師未記載は全て当館学芸員が担当。

平成31年春季 展示室の貸出し事業

	展示内容	申請者	期間	来場者数 (主催者集計)	展示室
1	高橋伸展	高橋伸	平成31年3月28日 ～4月2日	570人	第1・2
2	苫小牧美術協会春季展	苫小牧美術協会	平成31年4月4日 ～4月9日	639人	第1・2・3

当館では、市内で活動実績のある個人や団体等に発表の場を提供することを目的として、毎年春季に展示室の貸出し事業を実施しています。

小泉 雅生（主査）

標本を残す大切さ ～ウトナイ湖の昆虫採集・標本づくり～

初夏の6月下旬、ウトナイ湖で昆虫採集を実施しました。集まったのは小学生から大人までの15名。虫捕り網といったお馴染みの道具から、「バイトトラップ（落とし穴による採集方法）」という少し高度な方法も使って昆虫を採集しました。季節外れの寒い日ということもあって、チョウやトンボなどメジャーな昆虫の姿はほとんどありませんでした。しかし、最初はなかなか見つけられなかった参加者も、途中からはどんどん昆虫を見つけ出す「ハンター」と化し、結果的にハムシの仲間やカミキリムシの仲間など多くの昆虫を採集できました。採集した昆虫は、日を改めて再び博物館に集まり、標本にしました。ピンセットを使った細かい作業でしたが、なんとか全員が一つ以上完成させることができました。

「標本」は今の自然の姿を未来に伝え

る証拠です。その標本を集めて永く保管することは博物館の重要な仕事のひとつです。楽しく昆虫採集と標本づくりをすることを通して、参加者が重要な仕事の一翼を担ったことが少しでも伝わっていればと思います。

参加者が作った標本は当館に保管され、今後、展示や教育に活用していく予定です。

江崎 逸郎（主任学芸員／自然史）

※ウトナイ湖での昆虫採集は保全のため奨励されていませんが、今回は博物館の資料収集の一環として特別に実施しました。



昆虫を調べているところ



参加者が作成した標本

企画展



展示風景 (大島慶太郎)



展示風景 (小島歌織)



展示風景 (山田啓貴)

「NITTAN ART FILES」：内なる旅／モノに宿された記憶 ―物質と記憶の交差する地点



展示風景 (浅井真理子)

当館では2013年のリニューアル以降、美術と博物という複合施設としての特性を活かした展覧会活動を継続的に実施しています。2015年度より隔年で実施している「NITTAN ART FILE」は、当館の立地する北海道における「胆振・日高地方=日胆(にったん)」ゆかりの現代美術を紹介する展覧会シリーズです。第3弾となる本展では、独自性の高い表現を追求している4人の現代作家をとりあげ、ミュージアムにおける「モノ=資料、事物、対象」との出会いがもたらす感動や郷愁、そして時空を超えて心の中に宿される記憶や物語など、想像力が導くイメージを“内なる旅”として位置づけました。

体系的に資料や作品を収集・展示する場であるミュージアムは、モノに宿された記憶をもコレクションする、いわば精神と物質の交差点ともいえるでしょう。本展ではそうしたモノとヒトにまつわる個々の記憶や集合的な記憶が折り重なる場において、日常や身のまわりのモノに着想を得た表現を探求する山田啓貴の絵画、大島慶太郎の映像、小島歌織のデザイン、そして浅井真理子のインスタレーションを紹介し、郷愁やユーモア、そして魅惑に満ちた“内なる旅”を体感していただく機会を設けました。地域性や博物館という場所性を意識した作品の数々からは、作者の精神世界が垣間見えるようであり、様々な解釈が可能なその作品世界は、現代人やそれを取り巻く社会の内奥に呼応する表現のように感じられました。

連動企画として同時期に開催した、坂東史樹の苫小牧西港をモチーフとする模型作品を配置する中庭展示 Vol.13「小さくて深い空」も多くの方々からご好評をいただき、観覧者数も目標としていた3,000人を超えることができました。今後も地域に根ざした美術館活動を展開しながら、独創的かつ優れた表現を紹介していければと思います。

細矢 久人(主任学芸員/美術)

企画展



解説会風景



「大正・昭和の鳥瞰図と空から見た昭和30年代の苫小牧」

企画展は、「鳥瞰」という共通テーマのもと、鳥瞰図と空撮写真という手法や時代が異なる表現を通じて苫小牧の移り変わりを紹介いたしました。大正時代から昭和時代のはじめ鉄道網の発達に伴う空前の行楽ブームの到来とともに、全国各地の宣伝と集客のために爆発的な評判を呼んだ鳥瞰図。特に第一人者であった吉田初三郎は、日本列島をまるごと鳥の目の視野に収め、鉄道網と新旧名所をパノラマ絵画に再現する作風で、制作総数1,600点以上とも言われるほどの高い人気を誇りました。昭和20年代後半には、市制が施行されたばかりの苫小牧市も吉田初三郎に依頼し、鳥瞰図を制作します。一方、昭和30年代に入ると、写真家・志方孝之が苫小牧港の建設過程と発展する街の記録を目的に、街並みの空撮を行います。

本展では吉田初三郎をはじめ金子常光など鳥瞰図の代表的作家の作品を北翔大学水野信太郎教授のご協力を得て紹介するとともに、旧志方写真館が撮影した今から60年ほど前と現在の苫小牧市街地の空撮の対比を行いました。絵師達が想像力を駆使して描いた全国の地方都市の図から、当時の景観や経済産業状況などを振り返るとともに、地元の写真家が信念をもって撮影し続けた昭和30年代の活力あふれる苫小牧の姿を通して、ご覧いただいた人達が、現在の街づくりの指針を得るようにとの願いを込めた企画です。

武田 正哉(副主幹(学芸員)/歴史)

企画展



展示風景

「浅野武彦の木版画の世界」 —いのちを見つめる真摯な眼差し

浅野武彦（1927-2016）は、苫小牧市内の病院に勤め、長年内科医師として市民の健康を支える一方で、木版画家として生涯制作を続けた苫小牧ゆかりの作家です。1954年に札幌版画協会の創立会員として活躍し、1992年には苫小牧市文化賞を受賞しました。

本展では、浅野の作品と資料合わせて111点を紹介しました。浅野は、北海道大学医学部生だった1946年に、白老町に疎開していた川上澄生（1895-1972）に師事し、手紙に作品を同封して指導を仰ぎました。川上からの返信には、作品への具体的な言及があり、これらの書簡は、川上の指導という観点からも貴重な資料です。本展では、川上の浅野宛書簡と作品を並べて展示することで、作品鑑賞に加えて、川上直筆の文章にじみ出る芸術家同士のあたたかな交流の様子までご覧いただく機会となりました。

浅野は、自然といのちを愛した画家でした。風景を描いた作品では、自然の生み出した造形への感嘆から、岩肌の力強さを白黒の画面に描き出し、雪の柔らかさを多色刷りによって巧みに表現しました。また、骸骨を克明に描いた作品は、浅野が医師として、生から死を見つめ、いのちと向き合っていたからこそこの作品といえます。浅野の作品を一堂に会した本展にて、自然といのちを真摯な眼差しでとらえた浅野の作品世界を味わっていただけたのではないのでしょうか。

大谷 明子（学芸員／美術）

埋文センター活動報告

苫小牧市埋蔵文化財調査センターでは苫東地区のほか市内5か所で試掘調査を行いました。今年は晴天に恵まれることが多く、調査は順調に進みました。新たに4か所の遺跡が確認され、これで市内の遺跡は299か所となっています。試掘調査では約30mおきに1.5m×6m、深さ2mほどの穴を重機であけ、遺物が出土する黒土層の土を人の手で確認する調査を行っています。作業中はエゾシカやキタキツネなどが周りをウロチョロしていますが、今年はなんとヒグマも寄ってきたらしく足

跡が残されていたため、クマ鈴をつけながらの作業となりました。試掘調査で遺跡の大ききかな有無を確認し、遺跡があれば今後その周辺を開発する際には発掘調査などが必要となってきます。そうして市内の遺跡分布状況を確認していくことも埋蔵文化財調査センターの役割の一つです。また、今年度は昨年度まで発掘調査を行った市内の2遺跡の報告書も刊行しました。報告書は発掘の経緯や周辺の地形や環境、確認された遺構や出土した遺物を記録した実測図などが記載されています。こうした報告書用の図などを描いたり整理したりすることも仕事です。報告

書は美術博物館にあるので興味のある方はお声掛けください。

岩波 連（学芸員／考古・埋蔵文化財調査センター兼務）



調査風景

勇武津資料館通信

当館実施の事業は、ふるさと歴史講座・探訪・生活体験教室・機織り体験教室など、16項目あります。そのほかにも出前講座など、依頼があれば対応できるようにしています。

今年度も勇払地区（勇払小と勇払中）のコミュニティー・スクール（CS）事業として小・中学校合同の「藍染め体験教室」を実施しました。以下、令和元年度に実施した主な行事を紹介したいと思います。

ふるさと歴史講座は「旧勇払川河口について」（1月）、「船 絵馬にみる北前船」（2月）、「勇払のカササギ」（3

月）の表題で3回開催されました。

ふるさと探訪は、「勇払の植物観察」（7月）や、「勇払の歴史散歩」（9月）、新たな学芸員によるリニューアルした「勇払海岸の生き物・漂着物調査」（10月）の3回が開催され、「勇払の歴史散歩」では勇武津不動尊、会所跡、松浦武四郎について解説をしながら辿りました。

生活体験教室は、8回実施しました。相変わらず圧倒的に参加者が多いのは定員超えの「くん製づくりに挑戦」でした。

機織り体験教室では、平成20年の手織りサークル結成以来、携帯織機を3台増やし10台にしたことから、7月

のアートフェスティバルでは、2時間余りで40名の参加者がティーマットを織ることができ、好評でした。来年度もオファーがあれば協力したいと思います。

二階堂 啓也（事務員）



歴史探訪（松浦武四郎の説明板前で解説）

館長コラムNO.7

「あみゅー」・「勇武津資料館」の一年を振り返って

あみゅーの展示事業では、大正8年創業から100年を迎えた老舗洋食店を紹介する「第一洋食店の100年と苦小牧」を開催しました。時代の流れの中で多くの芸術家が集う文化サロンとしての役割を担い、本市の発展の足跡にふれることで、その懐かしさから市内のみならず道外から訪れる方にも親しまれ、記憶に残る特別展となりました。

企画展では、考古学に対する理解を深めた「とまこまい考古コレクション」

やモノから発せられる思念、情景などの切り口から生み出される世界にふれた「NITTAN ART FILE3」、特集展示では、植物の形態の面白さ、美しさを実感した「植物細事記」、中庭展示では自然物を想起させる半谷学氏のオブジェ「花降り—Flower Fall」、会期を延長した板東史樹氏の「小さくて深い空」は、苦小牧西港を再現し、夢幻的な情景に何度もご来館される方もおられました。

教育普及事業では、館に関する広報誌を発行する「びとこま」や美術作品に対する興味や関心を高めるための授業「アウトリーチ事業」などの小中学生を対象にした事業や郷土の自然や歴史、芸術な

ど様々な分野の大学講座など様々な活動スタイルで当館を身近な存在としてご利用いただきました。

また、勇武津資料館におきましても小中学校合同の「藍染め体験教室」や「機械体験教室」などの生活体験教室では人と人とのふれあいを感じる事業となりました。

これからも館に親しんでいただきながら芸術文化、歴史等に関する事業を実施することで郷土への愛着と豊かな感性を育むという「ひとつづくり」に資するものとなるよう施設の体制充実に努めてまいります。

長谷川 文作（館長）

2020年度 展示会情報

○観覧料
一般 300円／大学生・高校生 200円／
中学生以下無料
※団体割引、免除規定があります
※特別展(年1回)の観覧料はその都度定めます
○年間パスポート
一般 900円／大学生・高校生 600円
※特別展のみ特別観覧料から一般 300円、
大学生・高校生 200円を引いた料金がかかります

特別展

■生誕 100年／ロボットと芸術～
越境するヒューマノイド
7月18日(土)～9月13日(日)

中庭展示

■第一期 Vol.14 艾沢詳子
4月29日(水・祝)～9月13日(日)

■第二期 Vol.15 磯崎道佳
10月10日(土)～12月13日(日)

美術博物館祭 2020 7月25日(土)～26日(日)

企画展

■水と生命～川と生き物のつながり～

4月29日(水・祝)～6月21日(日)

■紙とアートI：吉田傑 ダンボールといきもの

10月10日(土)～12月13日(日)

■八王子千人同心と蝦夷地

10月10日(土)～12月13日(日)

■総天然色！考古資料のあざやかな世界

1月9日(土)～3月7日(日)

収蔵品展

■イクパスイ 祈り捧げるもの一

4月29日(水・祝)～6月21日(日)

■色と絵

1月9日(土)～3月7日(日)

*展覧会の名称及び内容、時期等は予告なく変更する場合があります。ご了承ください。

収蔵資料紹介

展示室から 美々鹿肉缶詰製造所模型

明治時代、北海道の行政・開拓を担った開拓使は、地場産業の育成と近代化促進のため、アメリカをお手本にした缶詰製造事業に着手します。苦小牧では野生のエゾシカを原料とする缶詰を、猟期にあたる秋～冬にかけてつくりました。

明治11(1878)年に勇払郡植苗村美々に建設された缶詰製造所は、アメリカの缶詰工場を真似たコの字型をしています。内部には缶詰を煮沸する釜が2つあるほか、床に傾斜をつけて、中央の溝に廃液を集めるという設計上の工夫がみられます。写真と古文書をもとに製作された模型は、それらも含めて細部にわたり再現しています。

佐藤 麻莉(学芸員/歴史)



美々鹿肉缶詰製造所 50分の1模型
苦小牧市美術博物館蔵

美術博物館公式Facebook更新中です！
HPからも
アクセスできます。



表紙の写真

イクパスイ

イクパスイは捧酒箸と訳されるアイヌの儀礼に欠かせない道具です。儀礼の際には人(アイヌ)の言葉を神(カムイ)へ取り次ぐ重要な役割を果たします。刀剣や動物を模したもの、幾何学文様など彫刻技術の精巧さを見ることができます。また、かつては朱漆や黒漆を和人に注文して塗ってもらったとされており、和人とアイヌの交流を窺い知ることができます。

岩波 連(学芸員/考古)

編集後記

元号が新しくなって初めての美術博物館だより、いかがでしたでしょうか。HPやFacebook、Twitterでも随時情報を発信しておりますので、あわせてご覧ください。

沖津 かな(学芸員/自然史)

苦小牧市
美術博物館だより

令和2年3月31日発行・第7号

編集・発行：苦小牧市美術博物館(あみゅー) 〒053-0011 苦小牧市末広町3丁目9-7

TEL 0144-35-2550 FAX 0144-34-0408

URL <http://www.city.tomakomai.hokkaido.jp/hakubutsukan/>

開館時間：9:30～17:00(入館は16:30まで) 休館日：毎週月曜(祝日の場合は次の平日)、年末年始